

大般涅槃經の研究

長 谷 川 滋

一

仏陀の入滅は阿難や釈提桓因などの偈頌からも伺うことが出来るように多くの仏弟子、信者たちにとって驚天動地の出来事であった。釈提桓因の偈に

陰行無有常 但為興衰法

生者無不死 仏滅之為樂（大正一、二六頁下）

とあるように、また未離欲者の

悲慟殞絶自投於地。宛轉號咷不能自勝。戲歎而言。如来

滅度何其駛哉。世尊滅度何其疾哉（大正一二七頁中）

の文からも彼らの悲嘆せしことが伺い知れよう。

すなわち仏陀の入滅は三宝のひとつを失うことであり、仏教の崩壊に繋がるものであったと思われる。それ故、仏陀が

入滅するにあたっての「法と律とを汝等の今後の師とするべし」という教誡は彼らにとって一条の光であったに相違ない。

仏弟子たちの仏陀に対する思慕の念やみがたきものがあつたに相違ない。仏陀の偉大性を讃嘆するあまり、仏陀は超人的な特相を具備するものとして描写されるようになったのである。所謂三十二相八十種好、十八不共法などがそれである。

もつとも三十二相八十種好は遊行經（大正一、一二頁中）などに認められるが、十八不共法は認め難い。更にそれらは大乘の大般涅槃經などに見られるところの法身常住の思想への発展に繋がるものである。かような意味において小乗の涅槃經類（以下「小乘涅槃經典」と呼ぶことにする）と大乘の涅槃經関係いかなんということは、極めて重要な問題を提起してい

る。従って大乘の涅槃經典を認識するには小乗の涅槃經典を取りあげて詳細に考察する必要がある。

小乗涅槃經典は一般的にいつて、むしろ仏陀晩年の出来事を比較的、客觀的に記述している。つまり入滅に至るまでの晩年の行状実記とも言いうる如き經典である。長阿含經中の遊行經の経題は恐らくそうした観点から「遊行經」と名付けられたのであろう。かようにして仏陀晩年の出来事についての記述を傳承したものととして本經典類は非常に重要なものである。

周知のように小乗涅槃經典には多くの類本がある。それらを詳細に比較検討してみると必ずしも傳承の一致を見難く、種々なる傳承の形態を見ることが出来る。そこで本論文はかかる問題について留意し、類本を対比することにより形態の相違、類本相互の關係を能う限り論究した。

二

小乗涅槃經典には次のような類本がある。なお以下の論述には括弧内の略号を用いる。

1' Mahā-parinibbāna-suttanta (P本)

これはDN. (長部) に第十六經として収録されている經典であり、南方上座部所屬の經典である。なお遊行經、仏般泥洹經等の他の類本は經中に大善見王に関する記述を含有しているがこのP本中には認められずDN. の第十七經として mahāsuddassana-suttanta と題する単独の經典があり、それに相当するものである。BuddhaghosaによればこのP本中でそのすべてが説かれたという。^③

2' Mahā-pariniryāna-suttanta (S本)

これは中央アジアのTurfanで発見されて、一九五〇、五年にWaldschmidt氏により校訂出版された經典である。後述のように義浄訳、根本説一切有部毘奈耶雜事卷第三十五と卷第三十九に僅かな一部を除いて遂語的に一致する。この写本は紀元六、七世紀のもので言われ、Waldschmidt氏は「南北兩伝のテキストは何れも言語的に本源的なマガダ語の原本から殆ど同じ位離れているが、しかし有部の梵本はパーリよりも幾分原本に近い」との結論に到達している。また私は仏般泥洹經及び般泥洹經との關係も見逃すことが出来ないと考ええる。

三、仏般泥洹經二卷^⑦（白本）

これは西晋代に河内沙門白法祖によって漢訳された經典で、訳出年代は世紀後二九〇〜三〇六年である。また翻譯するに際し、ある程度、儒教的解釈で以って理解し、翻譯したのである。全般的に見て次の類本、般泥洹經二卷と極めて近い關係にある。

四、般泥洹經二卷^⑧（夫本）

この漢訳は経頭に「不載譯人附東晋録」とあり、古來失訳本として伝えられる經典である。「附東晋録」とあることから東晋録が編纂された頃（西紀後三一七〜四二〇年）には既に可見の經典であったことは明瞭である。この經典も前述の白本と共に古層に所屬せしめてもよいであろう。そして白本、失本、S本及び有本とは類似する箇所が多いことは以下に述べる通りである。

五、仏說阿含經第二遊行經三卷^⑨（遊本）

これは後秦の弘始年間（西紀後四一二〜四一三年）に仏陀耶舎と竺仏念との共訳にして、法蔵部あるいはそれに近い部派に所屬する經典である。経題「遊行經」は、本經典が世尊の入滅に至る前後の晩年の行状実記の如きであるという觀點

から、編纂者がかように名付けたものであろう。長阿含經では第二經であるが、DN.ではP本は第十六經に配置され、両者に位置の相違が認められる。この相違は從來言わるる如く、^⑩長阿含經では仏陀の超人性を明かすのを第一目的とするのに対し、DN.の方は仏教が外道よりも優れていることを標示せんとする目的の相違に依るものであろう。かかる目的の相違から後述の如き再編纂された可能性も充分あり得るであらう。

六、大般涅槃經三卷^⑪（法本）

これは大乘の大般涅槃經（曇無讖訳）と同一の經典名であるけれども内容は全く異なっていて、この小乘涅槃經典に含められる經典である。もつとも内容的には、処々に大乘佛教の影響が認められる。また他の經典ではすべて、阿闍世王及び七七不退轉法に関する説話から開始されるのに対して、この經典のみはPsalmsの記述から始まっており、それ以前の説話のいくつかは途中に挿入されており、編纂され直した可能性のある經典である。この經典の翻譯者は「法顯」とされるが、諸経録の対照、あるいは訳語の比較よりして、法顯の訳本とするには疑問のある經典である。「伝法顯訳」と見るべ

きであるが、略号は便宜上「法本」とする。

七、根本説一切有部毘奈耶雜事(有本)

これは義浄により西紀後七一〇年に訳出された經典である。この中の卷第三十五と卷第三十九^④までが小乗涅槃經典に相当する部分である。これは先に掲げたS本と殆ど遂語的に一致する經典である。なお、S本に比較して二、三の記事の増広が認められるけれども、S本の欠漏か、後世の附加のいづれかであろう。

この他に根本説一切有部毘奈耶雜事のチベット本にも相応する箇所があり、遂語的に全く一致する經典である。

またP本の注釈として、*Samantā-pāśāda-viśālinī* 中に *Mahā-parinibbāna-sutta-vannana* ^⑤がある。これは周知の如く、*Buddhaghosa* により西紀後五世紀頃に著わされた注釈書であり、歴史的知識や民間伝説、寓話類が処々に見られ、当時の世相の一端を伺うことが出来るものである。以上の二本は参考に資するものとする。

三

小乗涅槃經典が同一の原型から発展して現存する諸類本に

至ったか否か、これは經典発達史研究上、重要な問題点である。小乗涅槃經典が同一の原型から発展々開した確証があるわけではなく、数種の小乗涅槃經典の原型が存在したであろう可能性も否定出来ない。

しかし以下の論述において筆者は現存する小乗經典に関する限り、それらの源は一本であったのではないか、そして種々なる部派に伝持されて現存する諸類本の形をとるに至ったのではないかと考える。その主な理由として次の二点を挙げてみた。

一、諸類本を構成する説話の類似性。これは以下に示す、經典を説話ごとに区切って分類した表からも伺い知れよう。

その説話配列の順序は殆ど一致しており、一部に移動があるけれども大体において照合しうる説話をどこかに含んでいる。法本を除いて、すべての經典が *Paṭi* に関する七法に端を発する七七不退転法についての説話を劈頭に位置せしめて以下の事件を説き進めていることは表からも明白である(但し、法本も形を変えて七七法を含んでいることを考えれば同様と見なしうる)。つまり各經典とも殆ど同様の説話で、同様の配列で以って構成されているのである。説話の中には經

典によってそれぞれ独特の説話もあるが、これは伝持経路、伝持部派等の差異による後世の附加、改作と考えてもよい。

二、編纂目的の共通性。孰れも釈尊の入滅という仏教徒にとっての一大事件を中心とし、仏陀の最後の遊行過程を描写せんとする共通の編纂目的を有している。またそこに描写される仏陀は歴史的仏陀即ち開宗者としての釈尊であると同時に、次第に神話化されつつある段階の仏陀即ち三十二相八十種好等を具備しつつある仏陀であるという共通の仏陀観でもある。

以上の二点を主な理由として諸類本は、ほぼ同一の原型から発展々開し現存する經典の様相を程するまでに至り、更にその間、各經典は何段階かにわたり、変化したのであらうと考えられる。

四

第一の作業として前述のように、説話毎に区分し、煩雑となるけれども諸類本間の比較対照を試みた。この照合により相違箇所が明確となり、そのことが各類本間の在り方を決定するに重要な示唆を与えるものと考えられる。また説話の中

のいくつかは小乗涅槃經典外の經典中にも認められることは周知の通りである。そこで他の經典中に含まれる類似せる説話を、筆者の管見せる範圍内で参考として揭示した。なお、比較については次の約束に従うものとする。

- 1、事項欄の説話の配列順序は白本、失本のそれに従うものとする。
- 2、諸類本に示す番号は各經典に認められる説話の順序に従う。
- 3、「一」は相当箇所を欠くものである。
- 4、備考欄の記号は先に示した略号の頭文字を使用す。
- 5、有本、S本は逐語的に殆ど一致するため同一欄にまとめた。
- 6、他の經典中に認められる説話は最後の欄に示した。

以上出来るだけ詳細に比較検討して表にしてみた。その結果、説話構成の面から次のようなことが認められよう。

- (1) 白本、失本、有本及びS本の四本は殆ど類似している（以下第一類とす）。但し白本には白法祖自身の意識になるものか、あるいは白本の底本が不完全なものであったのではないかと考えられる箇所が多々ある。例えば、自灯明法灯明の教示^⑥、あるいは他の經典では三十七道品を示すのにこの白本のみは四四事八事とする点^⑦、また地動に關して八因を九因、三因を四因とすること^⑧、施食の功德果について一因しかあげ

類 本 比 較 対 照 表 (表I)

説話番号 (No.)		事項 (説話内容)		小乗涅槃經典					備考		類似説話
		白本	失本	S本 有本	遊本	P本	法本				
1	阿闍世王雨舎公を遣使。仏陀種族法をとく	1	1	1	1	1	11	(法)諸離車に仏は説示		Na.1.2 ○增阿34.2 Na.1.2.3 ○AN.7.20 ~ 25 ○AN.7.雨勢經 No.3 ○AN.6.22	
2	僧伽法を仏陀比丘衆に説示	2	2	2	2	2	12				
3	仏陀七七法及び六重法を説示	3	3	3	3	3	13	内容相違す①六法を欠く②二六重法			
4	Pāṭali 村への途中での説法	4	4	4	4	4	—	④P 三学 S 四諸偈①失 四諸八戒			
5	Nālanda 寺 Sariputta への説法	—	—	—	—	5	—			SN.47.12 增阿498 DN.28 戒阿18	
6	Pāṭali 村で説法。施食を受く	5	5	5	5	6	17	説法の相手④ウバソク①失 S パラモ ン居士			
7	Pāṭali 村繁栄と三過失の予言	6	6	6	6	7	—	P のみ相手を示す		Na.6 ○AN.5.213 Na.6 ~ 9 ○Udana 8-6	
8	Vasakara の施食、仏陀の説法	7	7	7	7	8	—	P S 偈一部一致			
9	Gotama 門 Gotama 津を通通	8	8	8	8	9	18	法以外は偈あり			
10	Koti 村での説法	9	9	9	9	10	—	①失 S ②三学 P 四諸三学③失 P 偈あり		MY.6.26 SN.56.21 增阿403	
11	Nāḍika 村での説法。死後について	10	10	10	10	11	—			Na.11.3 ○SN.55.8 ~ 10 Na.11 ~ 13 ○增阿 852 ~ 854	
12	Nāḍika 村での説法。十二支縁起について	11	11	11	—	—	—				
13	Nāḍika 村での説法。法鏡法門について	12	12	12	11	12	—				
14	Vesālī にて。Ambapālī の近づくを見る	13	13	13	—	13	15	失 S 四正勤四念処 P 四念処 P S 正知法偈			
15	Vesālī にて。Ambapālī への説法。施食	14	14	14	12	14	—	①失 不浄現 ②五目妨五増福③五戒			
16	Vesālī にて。Licchavi の言	15	15	15	13	15	14	④P は Ambap. との口論あり⑤四念処		Na.15.16.18 ○AN.6.20 ~ 28 ○增 10.11	
17	Vesālī にて。paṅgika mānava への説法	16	16	16	14	—	—	失⑤ S 偈失⑤ 布五威神について			

18	Vesālīにて。Ambapālīへの説法	17	17	17	15	16	16		
19	Venu村にて。毘沙陀耶のこと	—	17	—	16	—	—		
20	Venu村にて。雨安居のこと	18	18	18	17	17	—		
21	Venu村にて。発病	19	19	19	18	18	—		
22	Venu村にて。自燈明法燈明	20	20	20	19	19	—	①注意すべし	
23	Vesālīにて阿難に入滅近きことを暗示(四神足)	21	21	21	20	20	1	②法はここからはじまる	No.23, 24 ○ SN.51, 10 ○ Udāna 6-1 No.23-25 ○ AN.8, 7-10 No.25 ○ 増.37, 5
24	魔波旬の般涅槃勧告	22	22	22	21	21	2	①のみ偈なし	
25	説法。地動八因縁	23	23	23	22	22	3	②偈あり	AN.8, 69 増.37, 7
26	説法。八部衆	—	—	—	23	23	4		No.27 ○ AN.10, 29 No.27, 28 ○ AN.8, 16 No.28 ○ 雜阿11-6 ○ SN.35, 96
27	説法。八勝処	—	—	—	—	24	5		
28	説法。八解脱	—	—	—	—	—	6		
29	魔波旬の般涅槃勧告再説	—	—	—	25	26	7	③遊偈あり	
30	Ananda 仏陀へ留寿嘆願	24	24	24	26	27	8	④偈あり	
31	大林重閣講堂での説法三十七道品について	25	25	25	24	28	9	⑤自四四事八事⑥法偈あり	SN.6-14, Th.I, G.257 増.29, 218のみ一致
32	仏陀 Vesālīを象の如く振り返り見る	26	26	26	27	29	10	⑦⑧偈あり⑨法二のあとに前半部挿入	No.22, 33 ○ 増.36-3 No.23 ○ AN.4-1 7-62
33	Kustha村(5)での説法三字	—	27	27	28	30	19	⑩Pは Bhandha村	
34	各村を遊行説法 Bhoga村に至る	27	28	28	29	31	20	⑪法は四諦八聖道。その他は三字について	
35	地動三因縁	28	29	29	—	—	—	⑫⑬のみ四因縁	No.35, 36 ○ 中阿36
36	如來の不思議法。二十八天応化	29	30	30	—	—	—		

37	四大教法	30			AN. 4. 180 増—20. 5
38	鳩對村で弗波育帝に説法	—	—		
39	Pāpa 村にて。Malla に説法	31	32	—	
40	Pāpa 村にて。Cunda の施食	32	33	—	
41	Pāpa 村にて。惡比丘あり、仏四沙門を説く	33	34	—	
42	Kakutha 川を五百車輛通過後洗足す	34	35	—	
43	Putkasa への説法、仏陀の希有法	35	36	34	④兄弟農夫等の件二重に説く⑤偈あり 五戒⑥二論四諦
44	仏身光明	36	37	26	
45	川で沐浴	37	38	27	
46	二時の施食功德	38	39	28	①⑤ Hiranyavati ④法 Kakutha ⑤拘孫 ①一時のみ
47	Channa 比丘に対する梵壇罪	39	40	49	
48	七覺支について有比丘の偈	40	41	—	①劫資
49	一梵志の施食及び偈頌	—	—	—	
50	仏陀沙羅双樹間で北首獅子臥	41	42	39	No. 50. 63. 64 74 ○別雜 110
51	非時華開花	—	—	40	
52	Ananda 仏陀の後で悲嘆す	45	43	36	
53	仏陀 Ananda を称讃	46	44	37	
54	転輪聖王の四徳	47	45	38	No. 52—55 ○増—36-3 No. 54. 55 ○AN. 4. 129
55	Ananda の四徳	48	46	39	

56	大善見王經	49	48	47	43	40	④はDN.17を参照	DN.17
57	Uṇṇavaṇṇaを叱責	49	47	48	41	31		
58	転輪聖王葬法	44	49	37	44	34	④偈あり	
59	起塔に値する四種の人	—	—	38	45	35	④偈あり	AN.4.245
60	KusinaraのMallaに涅槃近きことを告ぐ	50	50	44	51	41		
61	Mallaの人々仏に会い三帰依	—	—	45	52	42		
62	王と王子阿晨について	51	51	—	—	—	④失主に四法がとかれる	
63	Subhadra六師外道について問う	52	52	51	46	43		No.50.63.64.74 ○別雜110
64	説法・四沙門八正道	53	53	52	47	44	④偈四種沙門を附す④失八惡道詳説⑤⑥	
65	説法。出家法	54	54	53	48	45	④増広されている	
66	女人に対する振るまい方	—	—	—	55	33		増-36-3
67	教説を汝らの師とすべし	55	55	54	56	46		
68	小小戒について	—	—	55	57	48		
69	比丘間の呼称法	—	—	56	58	47		
70	四処に対する敬信	—	56	57	53			AN.4.118
71	疑問あらば問うべし	56	57	58	60	50		
72	最後の教説	57	58	60	61	51	④法記別あり	No.72-74 ○SN.6.15 ○雜阿1197
73	仏入滅	58	59	61	62	52	①略説す	No.50.63.64 74 ○別雜110
74	神々・人々の悲嘆	59	60	61	63	53	④遺偈に増広あり	

ぬ点^⑧などである。

かかる点からすれば S 本に近いのは白本よりも失本である。

S 本と有本とは根本説一切有部に所属する經典であり、殆ど遂語的に一致する。S 本は六、七世紀の写本と言われているが、それは完全な形で発見されたのではあるまい。なぜなら遂語的に一致するけれども有本には、二、三、説話が増補されているからである。

(2) 法本では前半部即ち説話番号（以下 No. と略す）1～22 までの一部が No. 32 と No. 33 の間に挿入されている。恐らく編纂されし直されたのであろうと考えることも可能であろう。大乘仏教の影響も多分に受けているものと考えられる。^⑨ なお、No. 23 以下は P 本と全く一致する（以下第二類とする）。

(3) 法本の No. 11～18 を除いて考えてみるに諸本一致して含有している説話は、小乗涅槃經が編纂された時点の原型に近く、古い形態を残しているのではないだろうか。逆に各本特有の説話は殆ど後世の附加であろう。勿論、同内容の説話でも諸本によって修飾及び形容の程度が異なる。但しこのような考え方には批判もあるが一考すべきものである。

(4) 遊本はやや P 本、法本に近い説話配列を示すが、第一類に類似する点もある。

(5) 後世、附加された部分と考えられる説話を除外して見た場合、経頭より Cunda の施食に関する説話（No. 21）まではその配列は、ほぼ一致するが、その後の説話より入滅に至るまでのそれは一致しない。

その他、細部にわたって検討すれば種々の相違が認められよう。

五

法本の前半部の經典構成については暫く留保して、(4)、(5)の問題点について論ずる。

各經典には共通した説話とそうでない説話とがある。前者は一層、オリジナルに近い説話であると考えられ、ある結果の時点には既に存在していたものとみてよい。いっぽう後者は仏教々団の時代的、社会的な變動期に影響を受けて幾段階かにわたり増広敷衍されたものであろう。その時期として部派仏教時代あるいは初期大乘仏教の思想興隆の時期などが考えられる。

共通した説話について見ると、最初の阿闍世王及び七七不退転法に関する説話から Cunda (淳陀) の仏陀への施食と、Cunda に対する仏陀の説法 (No. 1~41) までの説話の配置は諸本すべて一致しており、移動は殆ど認められない。ただ説話によっては増補されているものもある。

ところが Cunda に関する説話に続く説話から、諸本により説話の順序を異にしている。その中でも遊本の世尊入滅までの説話移動には誠に甚しいものがある。説話自身は他の説話との連絡の必然性を持たないけれども、第一類と第二類が遊行と説法の順序の一定していることは表Ⅰからも伺える。

それ故、この問題の箇所にも一定した順序があったように考えられるのである。そこで私は次のように考えてみた。

先ず説話ごとに細分した前の表Ⅰから、説話群により更に次の如く区分 (A~K) してみる。

A、No. 42~45

Kakuttha 等の仏威神力。Putkasa に対する説話。

Hiraṇyavati 川の沐浴。

B、No. 46

二時の施食の功德果。

④ No. 47

Channa 比丘に対する梵檀罪。

C、No. 48~51.

沙羅双樹間で仏陀が北首し獅子臥 (共通する説話のみについて考えるので No. 48, 49, 51 は No. 50 を中心とする説話群とみなす)。

D、No. 52~55.

阿難称讃の説話群。

E、No. 56.

大善見王に関する説話

F、No. 57.

Uṇṇavaṇa、仏陀に叱責される。

G、No. 58

転輪聖王の葬法。

H、No. 59

起塔に値する四種の人 (如来・辟支仏・声聞・転輪王)。

I、No. 60~62

Malla に関する説話群。

J、No. 63~65

Subhadra に関する説話群。

㊦ No. 66

女人に対する振舞い方。

㊧ No. 67~69

種々の訓誡。

K, No. 70

仏陀に関して憶念せらるべき四処（生誕地・成道地・

転法輪地・般涅槃地）に対する敬信。

以上のように、問題の箇所を区分してみた。これらの説話が各類本においてどのような配列がなされているか。その移動について表わしたのが次の表Ⅱである。この比較表から、説話構成について次のことが認められよう。

(1) 先ず経文に多少の表現の差異はあれ、P本と法本とは説話構成は全く一致しており、法本がP本系のものであることの一証左となろう。表Ⅱを見る限り、P本と遊本とを一群とは為し難い。

(2) S本・有本・白本及び失本は㊦（Channa 比丘に対する梵檀罪）をBとCの間に挿入し、H・㊧を欠くなど比較的类型している。とりわけ前二本と失本とはEとFの交替、つま

説 話 移 動 対 照 表（表Ⅱ）

遊 本	P 本	法 本	白 本	S有 本本	有 本
B	A	A	A	A	A
A	B	B	B	B	B
G	C	C	㊦	㊦	㊦
H	F	F	C	C	C
C	K	K	F	D	D
F	㊦	㊦	G	E	F
E	G	G	D	F	E
I	H	H	E	G	G
J	D	D	I	I	I
D	E	E	J	J	J
K	I	I	㊧	㊧	㊧
㊦	J	J		K	K
㊧	㊧	㊧			
㊦	㊦	㊦			

り Upavāna に関する説話と大善見王に関する説話の交替である。

(3) P 本・法本と白本を比較した時、第一類と第二類の説話配列に共通性があり、ここに原型の概形が求められるのではないだろうか。

(4) 最も注意すべきは遊本である。この遊本のみが表にも認められるように説話の構成において全く異なり、独特である。他の經典が A B と配列されるのに対して、遊本のみは兩者逆転し、また ④ ⑤ ⑥ が散在するのに対して遊本は一ヶ処にまとめ、P 本と比較した時、遊本は G H、C F、E I J が一群となり移動している。

以上の四点のなかで、遊本の示す説話構成をどのように見るか、私は極めて独断的であるけれども次のように考えられるのではないかと思う。つまり、ある程度増広された時点において説話再構成の試みがなされたのではないかと。

經典発達史において、雖然と無雜作に説話が並列されている經典は、より初期に属す經典形態を有し、それに対して法数を整理し、整然と整理された經典は、それ以後の發展した形態（阿毘達磨の傾向とも言えよう）を有するものである。

かかる考えが許されるならば遊本の再構成された可能性が充ち分り得る。

このことを念頭において考えた場合、この遊本が再構成されたとの仮説に対して次の如き理由を挙げられよう。

(1) 先ず A B の記事に就いて考察する。A B とする白本等の六本では Cunda の施食のあとで、仏陀が Kusinara への途上、Kakutha 川で洗足洗顔し、更に Alara Kārama の弟子 Putkasa が仏陀の説法を聞きて仏に帰依、Hiraṇyavati 川で沐浴等の記事に次いで、Cunda が施食したその功德果が挿入されている。Cunda の施食の功德果を説くまでにかような記事の介在することは、物語の弛緩を助長するものである。これら六本の在り方に対して遊本は、Cunda の仏に対する施食とその施食の功德果の両説話を連続して説き、Kakutha 川の記事(遊本はここでも改作された可能性がある)へと続き、整然たる様相を呈している。

なお、Pali 聖典の中でも古層の中に属すると考えられる Uḍāna 中にもこの箇所と類似する説話群がある^⑧。そこでは Cunda の施食とその功德果は統一されておらず、遊本以外の六本と同様に両説話は分離している。この Uḍāna 中の両説

話の在り方も、遊本の構成の仕方が新しいことを示す一つの基準となるのではないかと考えられる。

(2)次にK(四処に対する敬信)の位置について。第二類ではUpavāsaに関する記事の直後にこの説話が認められ、白本を除く第一類は仏陀入滅前の最後の遺訓における最後に位置する。ところで、この四処については到底、仏陀の言葉とは為し難いことから、後世に附加されたものであろう。

ところが遊本では転輪聖王の四徳と阿難の四徳が説かれた直後に認められる。これについてはどのように考えられるか。

小乗涅槃經典の劈頭に七法が六及至七組説かれ、地動八因縁の説話に続いて八部衆、八勝処、八解脱が附加されて説かれた如く、遊本においても法数の一致、すなわち転輪聖王の四徳、阿難の四徳、そして仏陀に関して憶念せらるべき四処というように法数の一致していることからここに一括して並べたのではないかと考えられる。

以上の観点に立つならば起塔に値する四種の人の記事も同様に考えて並列してもよいようである。しかし、この記事だけは、転輪聖王の葬法中に、

而闍維之訖取舍利四衢道起立塔廟。

とあることと関連せしめて

天下有四種人。応得起塔香花繪蓋伎樂供養。

と説く方がこの場合には一貫性がある。

(3)①②③の移動を見るに、遊本以外ではそれらは散在する。これらの説話が何処に位置すべきか、その必然性はない。しかし第一類におけるNo.47、第二類におけるNo.66のような内容的にも僅かな記事が各經典中において、かかる位置に存することは奇遇の感たるを免れ難い。それらの説話は他の教説と共に仏陀の説法として認められるが、この三つは教説として説かれた意味が強い。それ故、遊本ではこれら諸説話の散在しているのを整理して一ヶ処にまとめたのではないだろうか。

増耆阿含經にも類似の記事が認められるが^⑧そこでも①②③と同内容の教説が散在している。これらのことから散在せる①②③の記事を遊本ではある時期にまとめた可能性は極めて強い。

以上三つの理由により遊本の部分的な説話再編成の可能性があるのではないかと見たのである。

前述のように全般的に仏陀の入滅前までの記事について、

説話と説話との連絡の必然性は、それらの説話自身にはなかったようである。すなわち、記事の移動、挿入が随時行なわれても前後関係は殆ど考慮されることなく、それ程、重要視はされなかったであろう。

ここでは涅槃經成立以前の各々の説話、すなわち表Ⅰに示した他經典における類似する説話との関係如何については考察することを控え、涅槃經成立以後のことについてを問題とした。勿論、かかる問題については、漢訳長阿含經に含まれる三十經、*Dīgha-Nikāya*に含まれる三十四經全体及び他の種々の經典との詳細な比較検討がなされた後で云々さるべきである。しかしこの小乗涅槃經に基づく限り次のことが言えよう。つまり長阿含經三十經と *Dīgha-Nikāya* 三十四經との順序が必ずしも一致するものではなく、長阿含經と *Dīgha-Nikāya* では編纂方針の立場が異なるとも言われる如く、個々の經典でもその意図に沿って変革を受ける可能性は多分にあったものと考えられる。

六

今まで見てきた各本間の相違は各本の在り方を決着するの

に重要な示唆を与えるものと思われる。観点の相違に依ってはなお問題視さるべき所もあるであろうから一私見たるを免れぬ箇所もある。小乗涅槃經典の各本が仏伝として如何なる發達段階に属し、如何なる思想の下にあるか、更に細部にわたる嚴密な研究、他の文献との関係如何も検討されなければなるまい。

簡単ながら最後に各經典の在り方、関係をまとめてみる。

先ず表Ⅰに示したの Σ 、 Δ 、 Γ 、増、増、雜阿などの經典に断片的に在する説話との関係はどうであろうか。 Σ 、 Δ 、 Γ などパーリ系の原典に存する説話は P 本と全く同文で殆ど一語一句同じである。これはパーリ系の三藏が同一部派、南方上座部の所伝によるからであろう。しかし漢訳の増、雜阿に存する説話は小乗涅槃經典の説話と比較した時、より古層の形態を持つ説話、殆ど同じ時代と思われる説話、増補敷衍され、かなり後世の形態を持つ説話などがあり、その中には大乘仏教の影響を色濃く反影せる説話もあり、両者の関係は一概に論じられない。恐らく伝持部派の相違のためであろう。この関係についても更に研究の余地がある。

ところで前述のように白本と失本とは極めてよく類似する

經典であるが、失本の方がやや時代的に遅れる。

白本は白法祖自身の意識に成るものか、白本の底本が不完全であったのか、あるいは教理そのものが整っていないまま伝持されたものか注意を要する部分がある。例えば、*Amha-pāṭi* 園林での説法において四正勤、四念処を欠くこと、自灯明法灯明の説話が他本よりも不完全なこと、維耶離国での四事八事、地動八因に九因を説くこと、及び三因に四因を説くこと、施食の功德果について一時しか説かぬこと等々である。これらは白本の底本が欠損していたのか、あるいは白法祖自身の意識、誤訳によるものであろう。また他の經典では偈頌に相当する部分が総て散文になっておることも注意すべきである。白法祖が儒教的に解釈して仏教を当時の人々に理解せしめるべく改作した箇所もあったようである。

白本に較ぶれば失本はこの限りではない。白本の整理された經典の發展形態をこの失本に見出すことが出来よう。その漢文自体も技巧を凝らし、可能な限り四文字一句の漢文に統一し、終始一貫しており他本と異なる。文学的にも注目すべき經典である。

両本ともに極めて近似の部派に伝持せられたようである。

出家法に於いて二百五十戒⁹⁾をその基準とすることは法藏部所伝とされている四分律の戒律を踏襲せるものである。しかし異部宗輪論によれば法藏部は仏塔崇拜を説いたと記すがこの両本にはない。その他、弥勒信仰についての挿入も両本に共通するところである。この二本と密接な関係にある經典がS本及び有本であり、この四本は説話の内容も大体に於いて共通している(表I参照)。S本と有本はともに説一切有部から後世展開した部派である根本説一切有部所伝のものである。

今までの検討からして、大胆な想定かも知れぬが、根本説一切有部の人々が自派の聖典のひとつである根本説一切有部毘奈耶雜事(殊にこの小乘涅槃經典に相当する箇所)を編纂するに際し、*Tatka*本生譚や白本及び失本の原本あるいはそれに類似せるテキストをその参考資料として引用したのではないだろうか。とりわけ、七七法の中の七知、四処の聖地のことがあり、地動八因縁の各因の記述の類似性、その他各処の記事の類似性から、失本と有本S本は、白本とS本有本の関係より濃厚である。このことから白本↓失本↓S本↓有本の一系統が考えられよう。この四本の相互の関係は更に検討を要するであろう。

仏陀観においては超人化、偉人化の少ない原始的な形態を止めるP本も説話については種々なる説話の増広を受けている。このP本は南方上座部所伝のものである。

法本は前半部を除いて組織的にはP本に最も類似している。それは南方所伝のものとも考えられるが大乗の影響も多分に受けていることは否めない。考えるに南方所伝の涅槃經を以って更に涅槃の事実を強調せんがために新たに編纂し直し、大乘思想やその用語等を利用し、新しい涅槃經たらしめんとしたのではないだろうか。

この法本について、石川海浄氏は遊本とP本とを止揚して述作された經典であろうと言われる。

最後に遊本について。これについても大胆な想定にして一試論であるが、説話と説話との前後の連絡の必然性がないにしても、記事の移動が甚しく、この遊本のみが他本と異質なことは先に述べた通りである。

また先に述べたように第一類及び第二類のそれぞれの説話をこの遊本が含んでいることは、第一類、第二類の經典を参照しつつ、長阿含經が編纂され直したと見ることも可能であろう。

注①

The Digha Nikāya, ed. by T. W. Rhys Davids and J. Estlin Carpenter. vol. II. London, 'The Pali Text Society' 1947. PP. 72~168

②

ibid. PP.169~199

③

Sumaṅgala-vilasini vol. III. P. 58. "Kusavati Ananda rājadhani sathahi pakarehi parikkhita alosi ti, Sahpan mahāsaddasana-suttam nithapevā Gaccha tvam Ananda ti adim aha.

④

Das Mahāparinirvāṇa-sūtra. Ernst Waldschmidt. Text in Sanskrit und Tibetisch, verglichen mit dem pali nebst einer Übersetzung der Chinesischen entspreche hung in Vinaya der Mūlasarvāstivādin. Teil I—III. Berlin. 1951.

⑤

山田竜城「梵語文典の諸文献」四十六頁

⑥

前掲書

⑦

大正蔵一、一六六一—一七五頁

⑧

同一七六一—一九一頁

⑨

同一—三〇頁

⑩

前田慧学著「原始仏教聖典の成立史研究」六二四—五頁

⑪

大正蔵一、一九一—二〇七頁

⑫

大正蔵二四、三八二—四〇三頁

⑬

東北No.6.adul ha phran thse gas kyī gshi

⑭

Sumaṅgala-vilasini vol. II. PP. 516—615 (PTS.)

⑮

白木と失本のちがいは次の通りである。

(白本)

今仏年已尊。且八十如故車無堅強。我身体如此無堅強。我本不為若曹說。無有墮地不死者。最上有天名不想入。寿八十億四千萬劫。会當復死。用是起經於天下。斷生死之根本。

(欠)

(尖本)

我亦已老。年且八十。形如故車。無牢無強。吾本說。生死有時。無生不終極。上有天名不想入其寿八十四千萬劫。彼亦有死。是以仏起經於天下。咸示泥洹大道。以斷生死之本。

我般泥以後、無得棄是經戒。転相承用。自思中外。端心正行当持戒法。中外合如常。其有四輩弟子……(大正藏一、一六四頁下)

我今都為身作錠令自歸。為法教錠令法自歸。彼何謂錠。何謂自歸。謂是專心在四志惟。一惟觀身。二惟觀痛。三惟觀意。四惟觀法。健制思念。斷不使想。是為一切作法教錠。当以自歸。吾為此已重說。如欲解者。当精進行中外戒法。必使如常。其有自歸。……(同一八〇頁上)

②① 例えは如來の五希有法(大正藏二四、三八六頁下)、仏佐の八相(同三九五頁中・下)前生譚(同三九七頁上——三九八頁下)などである。

②② 如來正法(大正藏一、一九六頁下)などは華嚴經典との関連が考えられる。一切種智(同二〇三頁下——二〇四頁上)にも注意すべきである。

②③ 石川海浄著「大般涅槃經三卷の有り方に就いて」(印度哲学と仏教の諸問題)

②④ 第一類 Kakuttha 川にて洗顔洗足・濁流のため水は飲めず
→ Putkasa のこと → Hiranyavati 川にて沐浴・飲水
第二類 Kakuttha 川の濁流を神変で清め飲水 → Putkasa のこと → Hiranyavati 川で沐浴

遊本 Putkasa のこと → 神変により清めた水を飲む・八種浄水 → 拘孫河にて沐浴

②⑤ Ullāsa—5
②⑥ 大正藏一、二〇頁中

②⑦ 増壹阿含經三六、八難品第四二—三(大正藏二、七五三頁下——七五四頁上)

②⑧ 国訳一切經阿含部一、解題三七頁。宇井伯壽著「印度哲学研究」第二、一四五頁。前田慧学著「原始仏教聖典の成立史的研究」六二四頁など

②⑨ 大正藏一、一六五頁中、同一八八頁上

③⑩ 遊本の増広についてみると四種ある
遊本独自の説話

- ①⑥ 大正藏一、一六五頁下
- ①⑦ 同一六六頁中及び一六五頁中
- ①⑧ 同一六八頁下
- ①⑨ 注⑤参照

No.19 (大正蔵一、十四頁下) No.49 (同二〇頁下)

増広改作の可能性のある説話

No.74 (同二六頁下—二七頁中) No.42,45 (同十九頁下—二〇頁上)

第二類にはなく第一類に共通する説話

No.17 (同十四頁上) No.41 (同十八頁中—下)

第一類になく第二類に共通する説話

No.26 (同十六頁中) No.28 (同十七頁上) No.51 (同二一頁上) No.59 (同二十頁中) No.66 (同二六頁上)

(経典の比較研究を行なうには尨大な仏典を網羅して論ずるのが当然であり、これでもまだ氷山の一角に過ぎない。しかし一角一角を極めてゆくことも必要ではないかと思う。この拙論を作成するに際し、宮坂先生はじめ諸先生方の御指導を賜ったことに對し、深く感謝する次第である。)

一九七三・十・二六